

天才的な僧侶たち



2024年8月10日、フリースタイルな僧侶たちは刊行15周年を迎えます。今号はこれまでの感謝を一冊に込めた15周年記念号として、いつもよりちょびっとだけページを増やしてお届けしています。

63号の特集は「謝」です。本当は潔く、特集「ありがとう」としたかったところですが、ちょっとだけ寄り道をしたくて、その一字を選びました。感謝だけではなく、謝罪、代謝の「謝」です。謝には「自分のせいで相手に負担が生じていることを認める」という意味のほかに、「去る」という意味もあるらしく、一字が「ありがとう(感謝)」、「ごめんなさい(謝罪)」、「さようなら(代謝)」につながっているって不思議だなぁ、と思ったところから、この特集ははじまりました。そして、その一字を媒介にした「三謝」の響きあうところに、私たちが「礼」というものへ感じている漠然とした窮屈さを、ほどいてくれるヒントがあるのでないかと、思えてきたのです。

「とりあえず、ありがとうって言っておけばいい」  
「お礼を言ったんだから文句ないよな、という牽制でもある」  
「ありがとうって言ったら負け」  
「ありがとうと言えば言うほど、削られるような感覚がする」

制作を進めていくうちに、「ありがとう」にまつわるさまざまな声を聞きました。たしかに、もうその言葉には、なにかと連呼していた平成初期の頃のような、全員にうんと言わせるほどの説得力はないのかもしれない。

しかしなぜなのか、時たまに「ありがとう」の言葉が、そうしたしがらみをくぐり抜けて、私自身をふっと掬いあげてくれるようなことがあります。そのとき、ありがとうの言葉や、その言葉とともに相手とのあいだで交わされているなにか、今そう言っているその場その一瞬を、愛おしく思えてならないのです。

そのありがとうって、なんなのでしょうか。たとえば、思い出せるのは、ありがとうでは決して言い表せないような恩に会い、それでもありがとうの言葉しか差し出すことができないような歯がゆさを味わったとき。言葉は軽薄で、どうしようもなく無意味で、情けなくて打ちひしがれるけど、それでも差し出さずにはいられなかった。そんなときあふれていた言葉は祈りにも近いような、少なくとも普段交わしている「ありがとう」を紐解くだけでは辿り着けない、さまざまな「謝」が重なり合った言葉のように思えました。

そんなありがとうや、あんなありがとう、そしてフリースタイルな僧侶たちの15年分のありがとうも拾い集めて、今ここから特集「謝」をはじめていきたいと思います。

# 謝

## 謝を解き放つ

文＝稲田ズイキ  
フリースタイルな僧侶たち 編集長

## 心に灯る謝を探して

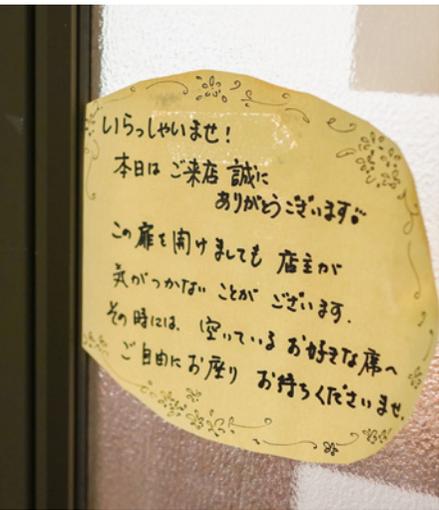


取材・文＝鶴飼ヨシキ

「難聴の人ってとりあえず謝るんです。最初に『ごめんなさい』って言って。それが癖になってしまっているんですね」  
「謝」について、柴田さんはまずこう答えた。  
「あと、微笑んでしまう。みんなが談笑しているなかで聴き取りづらくて孤独な人だけ、他の人の負担にならないようにとりあえず笑ってしまうんですね。空気を壊したくないという気持ちと、聴こえていないことを悟られたくないプライドの両方を抱えているんです」  
難聴は「目に見えない障害」と呼ばれるものの一つだ。さらに聴こえていた経験もある一方で、健聴者の気持ちも理解してしまう。その葛藤を抱えながら人と接する苦しさは僕が想像する以上に大きいものだろう。実際に社会から距離を取る難聴の方は予想するより多いという。

## 難聴の人って とりあえず謝るんです。 最初に「ごめんなさい」って。

撮影＝わかめかのこ



ゴハンカフェ ひつだんや  
京都府京都市中京区鍋屋町232 2階右側  
営業時間 10:30～17:00(木曜+不定休)  
Instagram@hitudanya

## 筆談カフェ 「ひつだんや」にて

言葉でのコミュニケーション。古くは手紙などの書面があれば、近年ではメールやアプリを使ったチャットもまた言葉である。ただ頻度としては、声による他者との交流が多いだろう。「ありがと」や「ごめんなさい」という言葉を幼いころに聞いて学び、学校や社会でそれぞれに適した言葉を口にする。

そもそも声によるコミュニケーションは社会のなかでうまく機能しているのだろうか。僕たちは心や感情というよくわからないものを、体を使って他者に伝える。そう知っているからこそ、相手の言葉には何かしらの想いがこもっていると意識せずとも考えている。しかし、相手の心や感情の本意を知ることができず、自らの経験を用いて予想し判断することでコミュニケーションは成り立っている。もう一方の見方もある。心や感情が先にあるのではなく、習慣的に発する言葉だ。言葉のコミュニケーションにはこの場合が案外多い。普段の挨拶やメールの文末は、半ば条件反射で声や指が発する言葉だ。

言葉によるコミュニケーションは、この両方が複合して行われている。一方は経験と予想によって言葉を思考して、もう一方

は習慣によって言葉を伝えて成立する。考えてみるととても複雑な行為だ。そして複雑だからこそ、言葉のコミュニケーションには問題が起こる可能性を常にはらんでいる。それが「謝」を考えるうえで、僕が興味を持った視点である。

コミュニケーションの複雑さについて考えるなかで、ふと出会った店がある。昼は観光客が往来し、夜は酒の場が集まる人たちが賑やかに京都の先斗町の一角で静かに店を営む「ゴハンカフェひつだんや」だ。  
店主の柴田さんご自身は中途失聴である。時を境に音が聴き取りづらくなる経験をした。料理をするのが好きで、誰かに料理をふるまって喜ぶ姿を見たい、その一心が店を開ききっかけになった。しかし以前の難聴を抱えながら社会で働いた経験から、接客対応をする難しさも心得ている。だからこそ、看板に「ひつだんや」と名前を掲げた。それが同じように苦労を体験している難聴・中途失聴の方にとっての居場所になったことに加え、健聴の人も興味を持ってこの店に来られるのは嬉しい驚きだとご本人は笑顔で語る。僕自身も以前にひつだんやの静かな店内で、四条大橋に向かう鴨川の流を眺めながら食べたフレンチトーストの味や、柴田さんとのさまざまな会話を今でも覚えていて。

「話せるけれども喋れないふりすることも結構多いです。滑らかに喋ってしまうと、普通に話しかけられてしまうんですね。説明しても戸惑う顔を見るのがまた苦しい。それだったら最初から話せないふりしてやり取りする方がスムーズに進むから、難聴の人でわざと喋らない人が割といはりますね。話さないことで相手にわかってもらう。これも見えない障害をわからせるひとつの方法ですね」

しかし、この話せないことを演じるというのは、ある意味では自分を偽ることであり、そこにまた新たな葛藤が生まれないのだろうか、と柴田さんに質問したところ「徹底的に困っている経験があるのが大きいですね」と答えが返ってきた。私の質問は改めて健聴の立場からのものであり、体験を超えた想像の難しさを痛感させられた。

一方、私たちは言葉の表層から真意を汲み取る難しさにも気付かされる。会話しながら微笑む人がいたとき、よほどどこなにか表情が変わらない限りこちらの想いを受け止めてくれていると考えるだろう。そこで両者に関係が生まれ、その後のやりとりではこの関係が持続する。関係を遮断し会話の流れを止めるのは、普段の会話でもストレスがかかるものだ。見えない難聴を見えるものにする、という方法の大きなものに、補聴器をつけ

る行為がある。しかし、補聴器をつけることにもまた葛藤があると柴田さんは言う。

「難聴と一言に言っても、自分自身で受け入れているかどうかで変わりますね。一気に聴こえなくなるのではなく段階的に悪くなる場合、聴力がある程度残っているときはぎりぎり会話ができる。そういう微妙なラインにいるときって『まだ大丈夫、まだ大丈夫……』と思っているんです。難聴だけど障害というところまでは行っていない、と。その時に『聴こえてへんかったん？』とか言われたらプライドがズタズタです。聴覚という五感のひとつを失っていることを認めるのって相当ハードルが高いんです」

私も自分が障害者だと自覚する前は、補聴器は絶対つけたくないと思ってたんです。当時はまだ『障害は隠せ』という時代で、支障が出ているのにつけることができない。恥ずかしい思いばかりしていても、聴こえていないと言えない。それで、もうこれは無理やっと思って初めて補聴器をつけた時に『楽』って思ったんです。ちくはくな受け答えしても『補聴器つけてはるこの人』って気づいてもらえる。障害を表に出すことができるのがすごいと思ったんです。

自覚して受け入れると、優しくされたら感動するんですよ、ありがとぅ！って。純



粹に喜んでしまいますね。自身が障害を受け入れていくかですごく変わってきます」  
 自分の中の悩みや葛藤を、相手に見せることによって解消するという点に興味を持った。一般的に葛藤やコンプレックスを解決する方法として、「どうになりたい」「どう思われたい」という心情が先にあり、それを表に出すことで解消されていく印象がある。しかしこの場合は相手に見えなかったものが見えることで、自らの悩みを受け入れる基礎が始まるような印象を受ける。

そもそも今回の取材のきっかけにもなったのは、お店に置いてあるノートだった。来店した人が自由に書くことができるノートで、たまに他のお店でも似たようなものは見るのだけれども、このノートには些細な内容でも言葉にかける想いの強さを感じた。

「難聴の方は普段の生活で雑談に飢えてはるんですよ。職場でもみんなが盛り上がりつつも、笑ってごまかしてしまふ。優しい人が会話の内容を書いてくれて、申し訳なさもあるし、そもそも雑談って書いて面白さが伝わるものじゃないんですよ。でもここやったら書いて雑談できる。またこの静かな環境やったらしゃべれる。どこも繋がってない難聴の方にとって、ここがありがたい場所になってるんじゃないですか」

雑談ができない。その一言に静かにショックを受けた。僕たちは無機質に繋がっているのではなく、どうでもいいこととやらだらないことを共有することで人々と共に生きていく。「孤独」という一言だけでは伝わらない、会話を共有できない苦しみの一面に触れた。

難聴や失聴と聞くと、交流手段としてまず手話を思い浮かべた。しかし、このお店は名前の通り筆談を看板に掲げている。しかし筆談というものを知ってはいないものを行ったことはない。そこで今回、柴田さんをお願いして筆談を行ってみたい。ホワイトボードを用意して、まずは挨拶からはじめる。「お昼どこに行かれましたか？」という何気ない質問に対して返答を返す。普段の会話では考えることもなくスラスラと出てくる言葉が、書くという行為に変換されることで、少しだけ考える間を要しながら進む。柴田さんは慣れているからか、その少しの間が僕より短い。

僕が書いた言葉に対して、柴田さんが気になった単語や一文に下線を引き、話題が展開していく。声での会話は、ひとつの話題について話しているように思いながらも、実は色んなポイントに移動しながら話しているのだと気付かされる。筆談は言葉の形にしながら、さらに注目する箇所に下線を引いたり丸をつけたたり

鴉飼ヨシキ  
 京都裏寺 極楽寺 / 三山木 念佛寺 僧侶。寺での活動のほかにも、podcast配信や大学での文芸イベント企画、音楽活動など、好きなものを好きに楽しんでいます。  
 Instagram @yoshikiukai

するので、何気ない会話であるにも関わらず、話の道筋が明確だ。  
 書き方も見ておきたい。筆談というものはアプリのチャットのように上から順に進んでいくものだと思っていたが、実際にはあちこちに線が伸びたり、間を埋めるように言葉が差し込まれたり、思いがこもるからこそ筆が進み、文字の形が崩れたり、はたから見ると整ってはいないものの、書いている方からすると会話の流れという流動的な線が見えている。会話の音量やリアクションのように、筆談にもまた感情の痕跡が読み取れる。

話題は次第に僕の過去に関する話に移る。僕は高校時代、学校に通うことができなかつた時期がある。隠しているわけではなく、いまからもう二十年近く昔のことではあるのだけれど、当時の心情を冷静に顧みることはなかった。あのころの気持ちを書いて他者に伝えるとき、駅の階段を降りることができなかった景色や、日中にひとり過ごした部屋の光景が蘇る。しかしそこに感情はない。映画のひと場面を描写するように、相手に伝わる言葉を選び、空白を文字で埋めていく。過去の記憶を言葉にするというのは、自らの体験を手放し他者にも伝わるものに変化させる行為だ。辛い経験は自分を離れ、そこにできた空白の風通しの心地よさを感じながら、筆談は終わった。

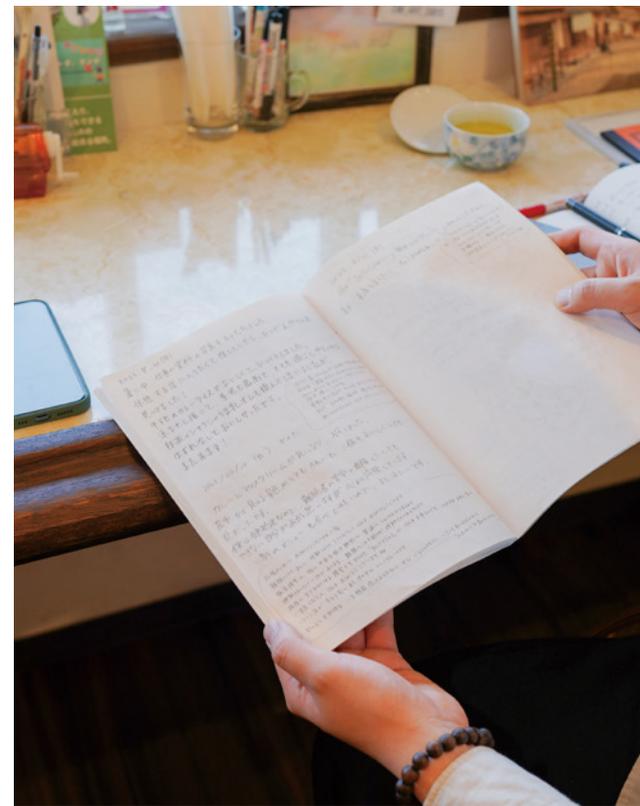
声のない世界で、心はどう現れるのか。社会には、想いとは別にコミュニケーションを成り立たせるための言葉があり、嘘とまでは言わないが私たちはそれを発しなければならぬときがある。しかしその言葉を多用し、形骸化させてしまい、心を共有できなくなるとき、人は孤独になるのだろうか。

一方で、心に火を灯して豊かな交流を行うのもまた、言葉によるコミュニケーションである。声を用いない筆談という環境で相手に想いを伝えようとするとき、そこに孤独はなかった。

柴田さんのお話のなかで、この店を面白がってくれる人がすごくありがたいという言葉もまた印象に残った。深い話をたくさん聞かせていただいたが、笑いながら話した内容も多く、僕自身も改めて難聴や言葉、共に生きるということに興味が増す時間を過ごした。



数冊に渡っているノート。ここからまた交流が生まれる。



ノートには思いが詰まっていて、自由に読むことも、伝えることもできる。

# 罪を懺悔すること



罪を懺悔すること

この冬、とあるチベット文化圏にお邪魔して、そこで行われている懺悔の儀式に参加した。

日本人は、「すみません」という言葉をよく使う。芸能人が不祥事を起こした時も、その一件に直接関与しない人たちから謝罪を求める声がSNSで叫ばれ、謝罪会見を開く特有の文化がある。こうした謝罪のあり方を見ていると「一体、誰が何のために謝っているのだろう」という疑問が浮かんだ。世間からの声に敏感で、そこから外れることに強い恐れを感じる日本人だから、何か問題が生じると世間からの許しを得るための形式的な謝罪が行われているのだろうか。一方、私がよく行くチベット文化圏では「ごめん」に該当する言葉は存在するが、日本人のように頻繁に使う習慣がない。むしろ些細なことで友人に謝罪した時「謝られると友達じゃないみたい」と言われたことがある。そんな民族に古くから伝わる懺悔の儀式では、誰が何に懺悔するのだろうか。

初めてチベット文化圏に行ったのは大学の頃で、もう10年以上経つ。ある時、人里離れた山にある寺の参道を歩いていると僧侶から「この地域のリアルを知るには村に行ったほうがいい」と話しかけられた。そして初対面にも関わらず、実家の住所を書いた紙をもらい、その紙を頼りに村を訪れて彼の両親と対面するも、私が来るのが全く共有されておらず「あなた、誰？何しに来たの？」と言われた。それから事情を説明していると「まあ、とりあえず家に

上がって。お茶飲んで」となり、その成り行きで、2週間ステイすることになった。見ず知らずの外国人をアポなしで迎えること自体、日本ではあり得ない。どうやって、その懐の広さを育んでいるのか。その理由が知りたくて、今もおチベット文化圏に足しげく通っている。

チベット仏教徒の間では、人間に生まれることは尊く、その境遇を得た今世では悪いことを避けて、善い行いをすることが共有されている。そして彼らの社会では、輪廻の思想は疑う余地のない事実である。なので、たとえ今世で人間だったとしても、自分の行い次第で、来世は虫に生まれる可能性がある。だからなのか、年に1〜2回、日ごろの行いを仏教の教えに照らし合わせて見つめ直し、自身の「罪」を悔過する儀式が行われている。チベット語で「罪」と呼ばれる儀式だ。私が参加した儀式は、尼僧と在家信者が参加し、16日間に渡って行われていた。2日に一度、食べ物・飲み物などを完全に断つ日があり、参加者はそれを守りつつ、儀式の中で自身の罪を仏の前で懺悔していく。儀式の詳しいルールや内容については、今回は触れないが、現地の人にとっても、心身ともにかなりハードな期間であることに違いない。私はというと、日本で食事を抜くことはたまにあるし「ちょっと頑張れば、乗り切れるだろう」と参加してみたものの、5日目を過ぎたあたりから、毎日、Tibetooでお寿司の画像を検索するようになった。空腹になると精

行できてなくて、すみません」とか「いい年なのに何一つ満足に達成したことがなくて、すみません」とか、そんなことが浮かんだ。空間のマジックなのか、「彼女たちからしてもらったように優しい気持ちで他者と接することができそうですよ」「全ての生き物から苦しみ取り除かれますように」という思いを抱くこともあった。

儀式が終わった今、自分の行いを改めて見つめてみると、微細なレベルから大きなものまで自分の身勝手な行為は依然として繰り返されていて、罪を悔過する前とほとんど変わらない。じゃあ、あの儀式は無駄だったのだろうか。というと、そうとは言えない。短い期間ではあるが、仏教の規範に則り、限りなく大きな存在を感じながら暮らすことで、いかに自分が不甲斐ない生き物なのか知ることができたからだ。

儀式を通じて、懺悔と謝罪の違いについて考えた。懺悔は特定の誰かや世間に対して頭を下げ、マイナスを0に近づけるような謝罪とは性質が違う。懺悔の基本は、自分自身の行いを恥じて、それが精進の種だと捉えた時に生じる思いを起こすことではないだろうか。自身の煩惱、未熟な側面を醜いものとして見ると、反射的に排除したくなるのだが、それも自分の一部であると認められると、無意識に感じている精神的な圧迫から解放される気がした。自分の劣る部分を見つけては「ダメな奴だ」と認定してしまふ行為は、自分を攻撃していると

も言える。それと同様に自分を必要以上に大きく見せる振る舞いの根底にも、劣等感がつきまとう。ないものねだりは尽きないのだが、どんな素敵な人にも心の偏りはあるだろう。そして自分の良い部分も嫌な部分も、自分を構成する要素の1パーツにすぎない。

知り合いのチベット人が「人はすぐに効果を得られるものを選びたがるが、仏教はそんなに簡単なものではない」と言っていた。これまで何の修行もしてこなかった私のような人間が、一度、懺悔の儀式に参加しただけで何か得られる方が怖いし、現実的に考えると、人間はすぐに変われない。だから、何度も同じような過ちを繰り返しつつも、その度に「ミリずつ心を動かしていくことが大事なのではないだろうか。」「いつまで経っても何も変わらない」と嘆くだけでなく、何か少しずつ行動しなければ、今まで私に優しく接してくれた人の思いを本当に無碍にしよう。

小さな決意表明をここに残し、このエッセイを終了したいと思う。

1 チベット文化圏で暮らす人は、魚を食べる事を避けている。いろんな理由があるのだが、その一つとして、彼らが小さなちりめんじゃこも、大きな牛も等しい生命体だと捉えていることが挙げられる。殺生は避けるべき行為であり、小さな生き物でお腹を満たそうとする場合、何匹もの命が犠牲になってしまうからだ。断食儀式中に「寿司を食べたくなっ」なんてことは、彼らの前では決して口にできない。



神的にも不安定になる。生命力が限界に近づくと、涙が溢れた」という話を聞いたことがあった。自分も同じような感情を抱くかと思ったが、残念ながらそれほど強い気持ちで湧き上がらない。私は浄土真宗の門徒の家庭に生まれたが、信仰心が薄いのか、仏教徒であると自信をもって言えない。それは、チベット文化圏に住む人々が激まなく仏に信頼を寄せ、仏教を信仰すること抜きに成立しない暮らしのあり方を目の当たりにしているからかもしれない。仏教は自分の気分によって信仰したり、信仰しな

かったりするものではないのに、私は仏教の教えを意識した生き方ができていない。そんないい加減な私が彼らと同じ環境に身を置き、見様見真似で五体投地しているとき、自分が積んできた罪の懺悔よりも先に「この場に見合うような人物でもないのに、快く受け入れてくれて申し訳ない」という気持ちで反芻した。断食しながら、一日中、五体投地や読経を繰り返すのだから、いくら体力のある現地の人だからといって辛いに決まっている。それなのに、「お腹空いてない？ちょっと休む？」と何度も声をかけてくれた。その感じは、本当の母のよう。仏教に帰依する人々と共に過ごすことによって、自分自身が照らし出される。すると、「いい年(34歳)なのに、何一つ親孝

写真・文=藤山亜弓  
京都在住、大学院でチベット文化圏の民間信仰について研究しています。凍らせたブルーベリーとサンゴールドキウイをヨーグルトに入れて食べるのにハマっています。

# ケンカと奉火

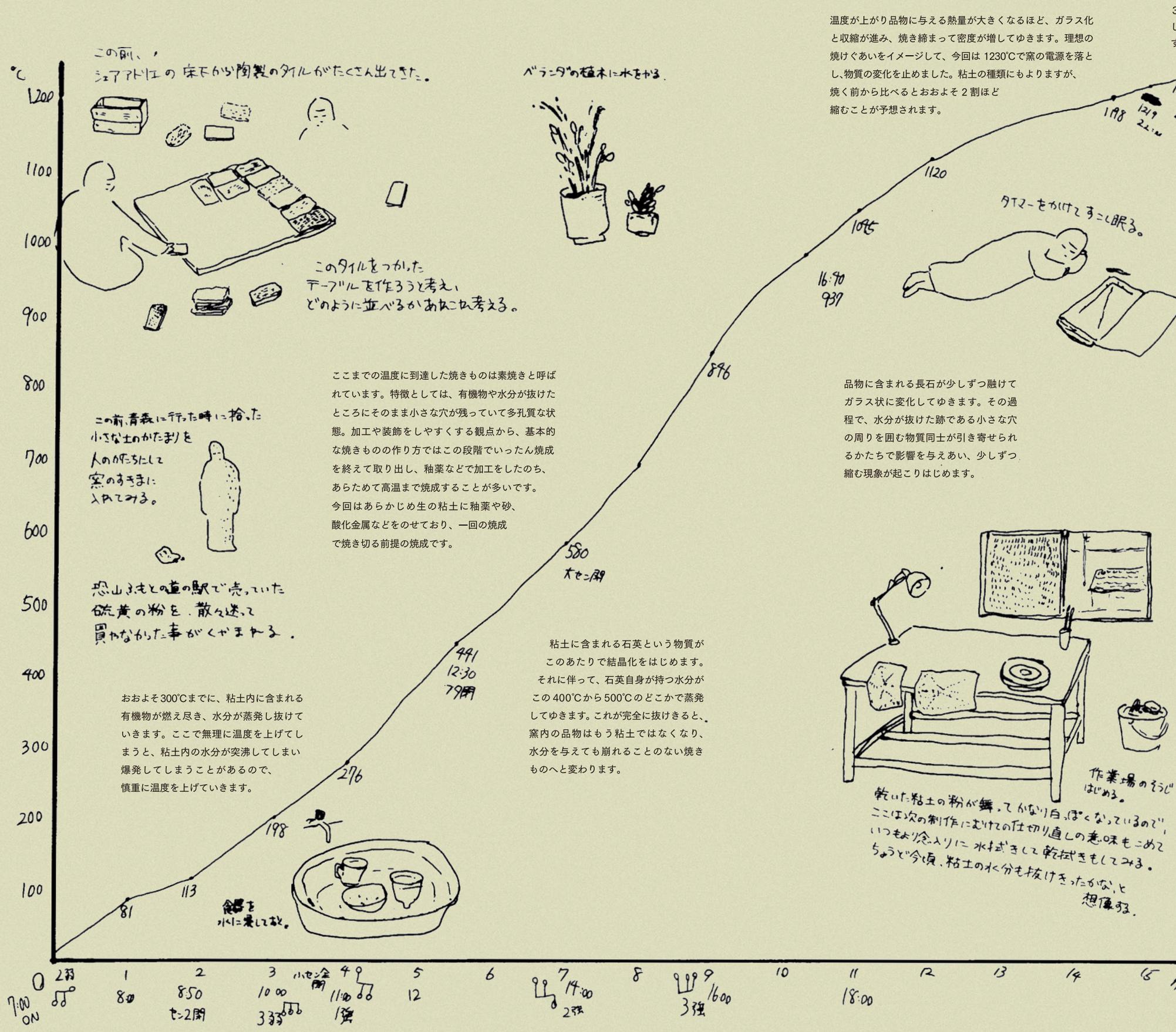
左義長まつり、近江八幡にて



文・写真=稲田ズイキ

ケンカから数時間後のこと。暗闇に包まれた神社では、「マッセマッセ」の掛け声のもと、十三基の左義長の山車が酔い潰れた龍のように境内を回遊していた。ひとたび左義長が鎮座すれば、しんと空気が変わる。息を吞んで火が灯される瞬間を待った。火除け、厄除け、五穀豊稔の願いを込めて、焼かれる左義長。美しくつくりあげ、破壊しあい、炎に散って、灰は願いに変わり、街に降り注ぐ。ケンカから奉火へ。はじまりは古く、長く続いているこの祭りの謝は、懐が深い。

さっきまで街中を巡行していた左義長の山車が、「セーノセ」の掛け声を合図に、もう一方の山車に突撃した。それが「ケンカ」のはじまりだった。自治体ごとに神社に奉納された十三基の左義長は意匠の美しさを競い合ったのち、一転してこのぶつけあいの儀式をくりひろげる。「あかん、泣きそう」と、左義長の担ぎ手の青年が言葉を漏らしていた。その涙のわけはなんだったのだろう。熱狂渦巻く境内で、ケンカが奉納であることの意味を考えていた。



陶芸と供養

# 焼きものを待ちながら

武内もも

こんにちは、武内ももといいます。京都にて陶芸を扱う作品制作をしています。自分の住む街や外出先で少しずつ粘土を集めながら、粘土や焼きものが持つ時間感覚や、焼きものが人の暮らしとともに過ごすということに関心を持って制作しています。このたび、「供養」というテーマで陶芸にまつわる記事を書いていただきたいという、おもしろい依頼をいただきました。どんな内容にしようかと考えたときに、ふと焼成グラフのことを連想しました。



《石と草》(2023) Photo by Haruka Oka

普段わたしは電気温度を上げる窯を用いて制作をしているのですが、手動での操作となるため、粘土を焼きものにするためには大体14時間ほど窯の面倒を見ながらその日を過ごすこととなります。そこで焼成の指針となるのが、焼成グラフです。これはどのくらいの時間をかけて何度まで上げるのか予め検討を立て、実際にどのように焼成を進めたかを記録するもので、ふつうは表立たないものですが、普段環境として私たちの周りを取りまく大地が素材として取り分けられ、人の暮らしに属する焼きものへとかたちを変えてゆく、その過程の記録でもあると考えています。

今回は、かつて私が記録した焼成グラフを元に、温度や熱によって粘土が変容していく道のりについて、また、それと同時に伴走する陶芸の制作者自身についての記録を、副音声のようなかたちで追記してみました。いまここにいる人と人同士の関係だけでなく、その周りを取りまく物質やもの、環境や現象とともに時間を共有し関係を持ち続けることの愛しさを見つけることができたかと思っています。

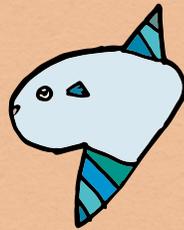
ここに書かれている陶芸の制作については、「新訂 古陶磁の科学」(内藤 匡)を参考にしつつ、制作者自身が陶芸を扱うなかでの実感に基づいて書かれています。



### 3 無心で踊る

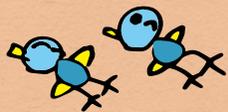
私の代謝はクラブに音楽を聴きに行くこと。無心で踊ると、不思議とゾーンに入ったようになる時があります。まるでそこに自分しか居ないような、気持ちが手放されるような感覚がありますね。あとは料理を作ること。好きな味付けの物を、好きなだけ食べれるって、幸福感を味わうのに一番手っ取り早い気がします。頑張った分、すぐに見返りがあると言うか。あとは友だちと話す。InputとOutputを繰り返すことですね。

まやこんぶ・Lady Gayaさん  
35歳 / DJ・飲食業

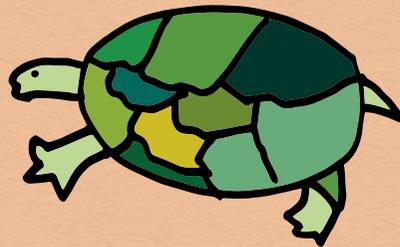


何度もフラッシュバックする悩みは、無理に解決しようとせず、そのままにしていることが多いです。やっているのは、悩みが思い浮かんだときに、今自分はこういうことを考えているなあ、と気づくこと。瞑想のテクニックに近いのかもしれない。一日10回思い出していたことが、次は5回になり、徐々に距離がとれるようになります。すると、少しずつ受け入れられて、自然に思い出せるようになることが多いです。

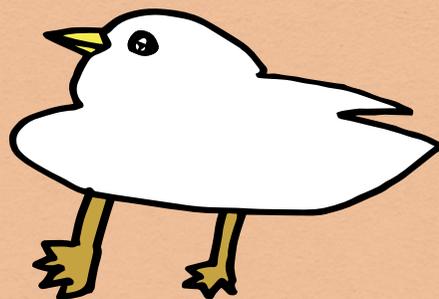
藤井泰玄さん  
33歳 / 僧侶



### 4 気づく



### 5 傍観者のように眺める

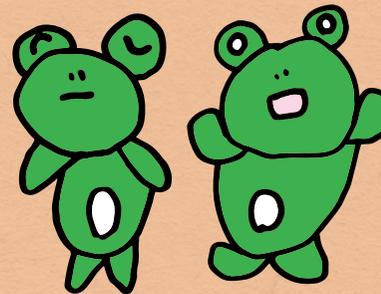


内面に居座り続ける感情や八方ふさがりの思いに、自分なりの代謝を促すとすれば、その原因となる事柄を一度客観的に眺めてみようとするのでしょうか。まるで他の人におこってしまったことのように、傍観者のように眺めてみる。そうすれば反省やら肯定やらと様々な感情が湧きでてきて、その気持ちに素直に従い行動を起こしてみると、とてもスッキリすることが多いような。ただそう簡単にいかないことも多々ありますが。

農家女子さん  
63歳 / 園芸業



### 1 一旦置いて、忘れる

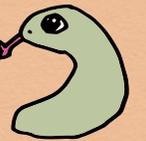


長年サッカーでゴールキーパーを担当しているので、周りを見て和ませようとする癖があり、できるだけ全体を客観的に見るように心がけるようにしています。そうはいっても、仕事でもチーム内に不和があったときに、自分は何もできなかったなあと、後悔を引きずってしまうこともあります。仕事するなかで、誰か強い感情をぶつけている人がいたときは、全体の淀んだ空気を流すように、あえて僕も強い感情をぶつけ返すこともあって、立ち位置を変化させています。

太ももがウエストさん  
30代 / 体育教師

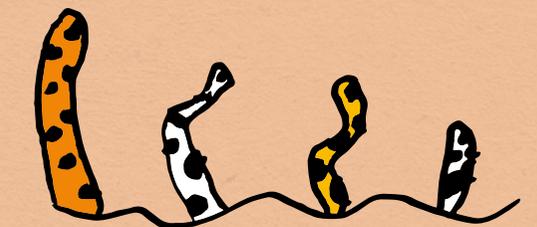
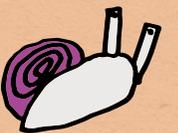
からだに代謝があるように、  
ころころにも代謝があるのかもしれない。  
日々の暮らしのなかで、とある気持ちや、  
ものごと、記憶、漠然とした流れのようなものが、  
自分のなかに持続し、残り続ける。  
そんなときの、自分なりの代謝を促す  
手段を尋ねました。  
あなたの代謝はどんなふうに使われていますか？

編集=わかめかのこ  
イラスト=NIKO(小学1年生)



うちは自営業で工務店やってるから、いつ仕事がなくなるかわからんって先行きの不安はよく感じる。昔は自分で手を動かすことが多かったから、ものづくりに集中すれば、そういうのは無くなったけど、今は営業や段取り組みが増えてきたから余計に。奥さんに励ましてもらうたり、子どもと遊んだり、その間は考えずに済むなあ。解消しようがないから、そういうのは一旦置いて忘れてのくりかえしやね。

黒川 匠さん  
50歳 / 大工



### 2 立ち位置を変える

**わかめ(わ)** 以前、だいちゃんの本を読む行為って、食べて身体に入っていくって知らん間に出て行っている状態に近くなって話をして。本を読む行為にも、自分の本棚にも代謝ってものが存在している気がしたんです。何か停滞すると、代謝がわるい、巡りがわるいというのと一緒に、自分の本棚はときどき代謝が悪いなあと思うんですよね。



編集=わかめかのこ

**わ** そうそう。逆に、図書館は代謝、巡りがいいなあと思う。誰かが必要としないもの、必要とされるものがある。「読みたい」という好奇心が本と結びついて、どこか別の場所へいって、また図書館にかえってくる。保有しているのに、保有していない感じ。

**大智(だ)** うんうん。代謝であり、循環みたいなね。勝手に流れていく仕組みのような。  
**う** だいさんが、ふるえる書庫をはじめたきっかけは？

**だ** 父親の本が山ほどあって、本当に代謝が悪い状態だったんです。家にも寺にも研究室にも本が大量。だから、元々点在しての本を1か所に集めて整理したいなって父と話をしていた。最初はスペースを借りようかみたいな話をしていたけど、この



©Kazuyuki Okada

# 読書と場所とその代謝について

大阪池田にある、ふるえる書庫にて。本を読むこと、言葉にすること、場所をひらくこと。あれやこれやと3人で雑談しました。



**わかめかのこ** 早寝早起き、朝散歩が日課。好きな食べ物はわかめ。

**鵜飼ヨシキ** 笑い声の特徴的なお坊さん。車間距離取りがち。

**釋 大智** ポール・マッカートニーと同じ誕生日。梅昆布茶にはまっている。

撮影=鵜飼ヨシキ

3万冊ある本を、それぞれ自分たちだけで消化するみたいなのはちょっと無理だなあと思って。  
**う** たしかにこの量は、一人で扱おうとすると胃もたれしそう。  
**だ** だから地域にひらいて、文化的な資源として何かこう還元できひんかなみたいなので、ふるえる書庫になりました。

**わ** 私と鵜飼さんは初めて来させてもらったけど、なんか本棚の佇まいというか、居心地がめっちゃいいですね。  
**う** それ、僕も思った。近寄りやすい本棚ってあるけど、ここは近寄りやすく感じるなあ。手に取るのを躊躇しないというか。

**だ** 最初は、綺麗にジャンルとかに分けて並べたいなとか思ってたんですけど「雑多に並んでるからこそ出会いがあって面白い」という言葉ももたらして。そういう言葉に甘えて何もないです(笑)。雑多さが近寄りやすさになってるのかなあ。  
**わ** 相手の意図が見えすぎると、怖くなってくるというか。なんなんでしょうね。何かこう本棚が、迫ってくる感じ。  
**だ** 完成されていると、自分の思考が



ふるえる書庫  
大阪府池田市古江町451  
Instagram @furueru\_shoko

**う** 半地下から。面白いなあ。入りづらいですよ。ちなみに、その代謝とか循環の話とかいうと、この書庫を作る時に独立研究者の森田真生さんに相談してみたんですよ。どんな書庫がいいですかね？って。そしたら、半地下という地下がある書庫はどう？って。

**だ** 地下というか、もう床が地面で土になっていて、そこに読まなくなった本をどんどん掘りこんでいくと、長い年月をかけて、その本が腐っていくって、情報が土に還っていくような。情報版コンポスト的な。たまに土を回して、空気をいれて、みたいな。

**わ** ふるえる書庫にはどんな人がくるんですか？  
**だ** 僕は最初、本だけ読みにくる人が来ると思ってたんですよ。でも全然

空気をいれて、みたいな。  
**だ** そうそう。実際にはやっぱりできなかったんですけど、考え方とか概念はめっちゃ面白いなと思ったんです。森田さんのウェブサイトに、時間が経つと寄稿した文が滲んで消えていく仕様に なっていて。情報そのものを代謝や循環を促す仕組みが、面白いなあ。  
**う** 『ニューヨーク公共図書館エクス・リプリス』っていうドキュメンタリーを思い出しましたわ。  
**わ** 予告動画に、「図書館は本の置き場ではなくって、図書館とは人なんです」ってありますね。いい言葉やなあ。  
**だ** すごいわかる気がしますね。田中元子さんの『マイパブリックとグランドレベル』っていう本が好きで。マイパブリックって矛盾する言葉のはずなのに、すごいしっくりくるんです。私自身の公共。公共はみんなのためのも



のなのに、それにマイがつく。  
わ 全然見えない誰かのための公共性というよりは、身近な安心できる場所みたいなニュアンスですかね。近所の公園とか、京都の鴨川とかが頭に浮かぶなあ。

だ そうそう。小さい公共。自分が好きなものをオープンにして、これに共感できる人はそれに来てくださいな、ぐらいいの小さい場所とか空間とか。「誰でも受け入れられます！」って、あまりリアルではないなあ。小さい公共が地域にたくさんあるっていう方が理想的じゃないかみたいな話を田中さんの本では話されてる。

う 公共って行政が市民のために、みたいな規模感で考えられがちだけど、個人が持っているものであったり、興味あるものを開いたりっていう感じか。必要ですよ。僕のお寺もその辺のことをよく考えてますわ。



だ ちょっと話変わるんですけど、2人とも月何冊くらい本読んでいます？

う 僕は読めなくなっていますね。月1、2冊のペースかな。忙しくなったのもあると思うんですが、それ以外にもなんか理由ありそうな気がするなあ。

わ 私月2、3冊ですね。20代の頃は没頭し続けてたので、いろんなジャンルをたくさん読めてたけど、今は身体とか東洋医学とかそういうのが多いですね。う たしかに僕も、人文系に最近は絞られてるなあ。

だ 実践するための読書の？

わ そうかも。日々の生活のための読書かな。どこかヘトリップするための読書ではないかも。

だ 僕も20代の手当たり次第読んでいたときより随分変わっているんですよ。若松英輔さんの講演を企画させてもらったときに、若松さんが「本は量じゃないよ。有限だから。自分にとって、いい本に出

会ってくださいね」って教えてくださった。

わ ああ、なんか安心します。最近読めてないなああって、なんとなく罪悪感に包まれていました。

だ あと、毎日何か自分の言葉をノートに書いてくださいます。何も書けなかったら、「何も書けない」と書いてつても教えてもらいました。

わ 自分の今を外に出す、代謝ですね。

だ まさにそうだなと思います。自分の中から外へ出す感覚。本にある言葉や先人の言葉は街灯で、自分を導く言葉は自分からしか出ない。そういう言葉といつか出会ってほしいって教えてもらったんですよ。

う 本を読んだり、情報を入れるだけでは、過食になっちゃう感じですね。すぐに出しておく、というね。それも代謝や。

わ しかもそれが誰かのための外向けのための言葉ではなくって、自分が読むための言葉だけのも、なんかしっくりくるなあ。

だ そうそれが、いつか自分にかえってくる。出したときの言葉に自分が救われるときが来るんですよ。そういうのに出会えるといいなあと思います。

わたしの代謝を促す本たち 雑談の記憶をふりかえりながら、3人それぞれの代謝を促す本の存在を考えてみました。

『BODY JOURN—  
手あての人とセルフケア』  
つるやももこ  
アノニマ・スタジオ (2020年)

からだところ、両方あって「わたし」であると気づかせてくれた1冊。からだのつかえは、こころのつかえである。その逆もしかり。つかえがあることに気づいたら、とにかく歩く。そうすれば、からだもこころも自分の心地よい場所に戻っていくよう。日々実践中。(わかめ)

『うらおもて人生録』  
色川武大  
新潮社 (1987年)

若い「劣等生」に向けて書かれた人生録。いまだに噛み砕きながら消化しているのですが、歳を重ね勝負が必要になった場面で、もしかしてこの瞬間のことを言っていたんじゃないかと、ふと本書の言葉が心に湧きます。ほくにとって滋養の溢れる一冊です。(鶏飼)

『センス・オブ・ワンダー』  
レイチェル・カーソン、森田真生  
筑摩書房 (2024年)

森田真生さんによる『センス・オブ・ワンダー』の新訳と「そのつづき」。大人と子どもが自然のなかで同じ時間を過ごし、自然の驚異や不思議に感性を開いていく。娘が生まれた年に読めたということもあり、まさに「腑に落ちた」。本にも摂取すべき時期やタイミングがあるのだろう。(大智)



# 発行史

2009-2024

フリースタイルな僧侶たち

編集＝秦正顕

フリスタが15年間で出した号はのべ63冊。これまでの歩みを、歴代編集長のコメントとともに、年表で振り返りました。フリスタ15年の歩みをご自身の人生と共に振り返っていただけましたら幸いです。

フリスタの出発点は、「仏教って本当に苦しみや悩みを解決してくれるのか？」という問いでした。当時の自分は20代後半で、同世代の人と一緒に仏教を眺めたいという思いがありました。ただ、その頃のお寺は、今よりもさらに敷居が高く、お寺にも仏教にも興味はあるけど、情報も少なく近づきがたいという声が多かったです。だからフリスタが専内役として、仏教が身近になるような情報をとにかく出し続けるということを目標にしています。

1 次の時代の仏教のために  
2 「和」の精神を生きたり  
3 お寺に生まれ「僧侶×何か」が必要な時代に池口龍法×福田昇野

4 暖かいおじぎりを届けたい  
5 生きる仏教を、実践  
6 若手僧侶と一般人を繋ぐプロジェクトをスタート  
7 伝統と革新のあいだ  
8 お坊さんは面白い!!  
9 死の問題に本気で向き合う

## 仏教のあり方をフリースタイルに考えていこう!

初代代表 / 編集長 池口龍法

10 凍てつく空の下、ゆるめく炎の熱を感じる  
11 チベットを知るそして日本を知る  
12 フリスタメンバーが語る日本仏教の未来と理想  
13 「生かされる自由なエネルギー」に挑戦!  
14 「宿坊研究会」が「フリスタ」をジャックする!?  
15 ダライ・ラマ法王と高野山

16 インターネット寺院「彼岸寺」に込める  
17 「僧侶として歌う道」三浦明利  
18 「落語家まるこの仏道修行」アロアアマになりました  
19 お坊さんへの質問1000に答える  
20 過去のなかにある未来  
21 東日本大震災被災地の今を訪ねて  
22 経典をナメから読む「勇者と菩薩のアナロジー」  
23 タイ・チェンマイのお寺で瞑想体験してきました!  
24 仏教ラポ!「悟りマップ」をつくる  
25 心が傷ついた子どもたちを救いたい!「支援団体「メッタ」」  
26 お坊さんはなぜカクコイのか?  
27 ウルト木魚 日本を救う!

28 「お寺に行こう!」  
29 君は8時だよ! 神さま仏さまを知ってるか?  
30 この時代のものとなれ仏教  
31 お寺で宇宙学とは?  
32 歌は自分と向き合う道  
33 「坊さんはなぜガッコイのか」Part 2

2代目代表 / 編集長 若林唯人

34 ヤマブキブナ法話  
35 仏教マンガ「あした死ぬかもよ?」  
36 アナログレコードとお葬式

37 僧侶の目から見える「苦悩の光景」  
38 自分のために四国僧侶 路上の供養  
39 ふっつのお坊さんの生涯

40 魚を売るのも僧侶の仕事  
41 お坊さんの恋愛事情  
42 拝観料のゆくえ  
43 フリスタが見た尼僧アイドルの素顔  
44 進化系お守り

45 死の体験旅行  
46 フリスタの「中の人」  
47 仏教が私にくれたもの 魚川祐司  
48 おてらおやつクラブ  
49 苦めるいは生きつづらぬその先へ

50 吉村昇洋  
51 フェリンモおてらぶ  
52 修行  
53 お寺と奥様の化学反応 住職と檀家の間に  
54 少女がつむぐ、等身大の仏教「仏女新聞」  
55 仏教の未来に挑戦し続ける10周年

56 「5分で4コマ説法?!」「ぶっカフェ」小林ロクの世界  
57 お参りの記録共有サイト「ホトカミ」  
58 本気で地獄  
59 ヒトトリ

60 BIG LOVE  
61 休む  
62 金  
63 謝  
64 ??

40 魚を売るのも僧侶の仕事  
41 お坊さんの恋愛事情  
42 拝観料のゆくえ  
43 フリスタが見た尼僧アイドルの素顔  
44 進化系お守り

45 死の体験旅行  
46 フリスタの「中の人」  
47 仏教が私にくれたもの 魚川祐司  
48 おてらおやつクラブ  
49 苦めるいは生きつづらぬその先へ

50 吉村昇洋  
51 フェリンモおてらぶ  
52 修行  
53 お寺と奥様の化学反応 住職と檀家の間に  
54 少女がつむぐ、等身大の仏教「仏女新聞」  
55 仏教の未来に挑戦し続ける10周年

56 「5分で4コマ説法?!」「ぶっカフェ」小林ロクの世界  
57 お参りの記録共有サイト「ホトカミ」  
58 本気で地獄  
59 ヒトトリ

60 BIG LOVE  
61 休む  
62 金  
63 謝  
64 ??

60 BIG LOVE  
61 休む  
62 金  
63 謝  
64 ??

60 BIG LOVE  
61 休む  
62 金  
63 謝  
64 ??

60 BIG LOVE  
61 休む  
62 金  
63 謝  
64 ??

40 魚を売るのも僧侶の仕事  
41 お坊さんの恋愛事情  
42 拝観料のゆくえ  
43 フリスタが見た尼僧アイドルの素顔  
44 進化系お守り

45 死の体験旅行  
46 フリスタの「中の人」  
47 仏教が私にくれたもの 魚川祐司  
48 おてらおやつクラブ  
49 苦めるいは生きつづらぬその先へ

50 吉村昇洋  
51 フェリンモおてらぶ  
52 修行  
53 お寺と奥様の化学反応 住職と檀家の間に  
54 少女がつむぐ、等身大の仏教「仏女新聞」  
55 仏教の未来に挑戦し続ける10周年

56 「5分で4コマ説法?!」「ぶっカフェ」小林ロクの世界  
57 お参りの記録共有サイト「ホトカミ」  
58 本気で地獄  
59 ヒトトリ

60 BIG LOVE  
61 休む  
62 金  
63 謝  
64 ??

60 BIG LOVE  
61 休む  
62 金  
63 謝  
64 ??

60 BIG LOVE  
61 休む  
62 金  
63 謝  
64 ??

60 BIG LOVE  
61 休む  
62 金  
63 謝  
64 ??

## 生活の中に仏教がある

三代目代表 加賀俊裕

フリスタ編集部に加わったのは、修行から帰った29歳の頃でした。当時の私は頭でっかちで、納得できないものにはよく噛み付くような性格。そんな私をずいぶん丸くしてくれたのは、取材を通して出会った方々でした。それから代表にならせていただいた「生活の中に仏教がある」というテーマのもと、日常生活の「一挙手一投足に、仏教的な考え方や生き方を見出せないか」と考えながら読者のみなさんに読んでほしいという思いで活動していました。

## 今日の仏教の編集とは?

三代目 編集長 稲田ズイキ

半端な気持ちで修行道場を終えてしまい、お坊さんとしての人生が始まった。と塞ぎ込んでいた頃に出会ったのがフリスタでした。仏教ってこんなに自由なんだと教えてくれた雑誌です。編集部として関わった後、熱烈的なアピールの末に編集長を継がせてもらいました。「たっさんの価値観が飛び交う現代で、仏教ってどうあるべきなんだろう?」という大きな問いのもと、編集していった。意識していたのは、一方的な発信にしないということ。仏教側の世界に引き込むのではなく、相手の中から仏教を見つめたり、一緒に共通の課題を解決したり。最近、仏教の情報は増えつつあると思います。その中で、自分と仏教がどんな関係性を築くかっていうことを、自分たち自身も迷いながら、それを追体験してもらおうとして誌面を編集していました。

個人的に気に入っているのが61号の「休む」です。仏教的なモチベーションのもの、と、そうじゃないもの、と、同じテーマのものに気持ちよく配置できていて、直線的ではなく、寄り道しながらテーマが深まってゆくような読み心地になったと思っています。稲田

2代目代表 / 編集長 若林唯人

# 仏教と編集の今日まで そして明日から 稲田ズイキ×杉本恭子



いま私たちが言うお経とは、「結集」といって釈尊の死後、弟子たちが一同に介して会議を開き、その教えをまとめたものです。つまり、仏教は「編集」によって生まれたといえるのかもしれませんが。この15周年記念号で編集長を退任する稲田たつての希望で、杉本恭子さんとこれまでの制作を振り返りながら、編集と仏教にまつわる対談を行いました。

**杉本 恭子**  
フリーの編集・ライター。大阪生、京都在住。同志社大学大学院文学研究科新聞学専攻修了。自治的な場に関心をもち、寺院、NPO法人、中山間地域でのまちづくりなどを主なフィールドにインタビュー・取材を行っている。著書に『京大の文化事典—自由とカオスの生態系』（フィルムアート社）がある。

稲 え、忘れてるかも……  
杉 「稲田さんは才能あるんやし、世の中の形みたいなのに合わせていいんちゃう」って、心の底からの言葉を伝えたら、  
稲 あ、待って、思い出しました！  
杉 「今日、杉本さんに会えてよかったです」って、めっちゃ涙目で言われて。稲田さんの、その潤んでいる顔が記憶に残っています（笑）  
稲 なんてそんなに悩んでたんだろう（笑）

ふりかえる

稲 僕が3代目の編集長になったのは2020年の春でした。58号から63号まで、毎号ほんまに手探りのなかで制作してきた、その誌面が杉本さんの目にとど映っているのか、すんごく気に入ってまして。  
杉 感想を言うなんておこがましいですけど、私はいつもなにかを読んでいるときに「私はどうなんやろう」って思うタイプなんです。なので、率直に思ったことを伝えますね。

稲 実は、今日までに全号を読み直すつもりだったんですけど、読んでいるうちに恥ずかしくなってきた、58号しか読み直せてなくて……  
杉 なんてやねん（笑）  
稲（笑） 58号の特集本気で地獄は、初の号なんですけど、あらためて読み返すと、コンセプトが走りすぎてる気がしました。  
杉 ちょっと肩に力が入ってる感じでしたな。

稲 「僧侶たち」と名乗っている雑誌

の地獄特集なのに、仏教の地獄はメインで取り扱わずに、現代で地獄とされているものを取り上げたんですよ。『僕らはそっちに行きませんよ』っていう意志がむきだしだったかも。  
杉 フリスタは編集長ごとにコンセプトが変わると思うんですが、稲田さんはどう考えられてたんですか？  
稲 編集方針として、「行脚、世界。」という言葉が共有してました。三蔵法

師が新しいお経を見つけるために天竺へ旅に出る、みたいなイメージ。仏教の情報誌じゃなくて、もっと雑多でうねうねして、いろんな読み方ができるものにしたかったんです。  
杉 旅なんてですね。たしかに、他のページで仏教的な地獄が扱われてないがゆえに、巻頭インタビューのみうらじゅんさんが、どうすれば友だちと同じ地獄に堕ちられるかを懸命に考えた話ば、ものすごく仏教的に響いてきました。

稲 仏教的な記事とそうではない記事のギャップが激しいですね。  
杉 59号の特集「ひとり」は、本当に寂しかったんだろうなって思いましたよ。  
稲 そうっすねえ。58号のときからずっとコロナ禍で、編集部会議はぜんぶオンラインだったんです。あと、自宅待機をしないといけない時代に、フリーペーパーを入手してもらえない、スポーツに足を運んでもらわれないとけなくて、今こんな雑誌を発行する意義って何なんやろうって、思うこともありましたね。

稲 編集長の気持ちの状態とか、向いている方向が一号ごとに、明確に出てますね。で、突然テンションが上がって、60号は特集「BIG LOVE」でした。  
稲 不思議だなぁ（笑）  
杉 私、実はこの号が一番好きでした。藤山亜弓さんによる巻頭インタビュー「でか美ちゃんBIG LOVE」で、推しについて語るでか美ちゃんの言葉がめちゃくちゃ良くて。



写真= 藤山亜弓

で道をつくっていく旅型の信仰があるんじゃないかと。  
杉 私、今日はこの話題になると思っています。久しぶりに仏教辞典を引いてきたんです。まず帰依とは、「優れたものに對し自己の心身を投げ出して信仰すること」。信仰とは、「無垢な心で神仏を信頼し、崇拜すること」。そして、信心が、「疑いを離れた冷静で客観的な信頼。悟りの基盤となるもの」と書かれてあって、信仰を語る上ではこの信心の意味がしっくりくる気がするんです。たしかに、稲田さんの言う登山型はいわゆる出家者のモデルで、出家をしない人たちの仏教のあり方が、今あんまり語られてないんじゃないかと思えます。

稲 そうそう！日本の民間では昔から、仏教と神道、祖霊信仰とかが結びつけられて、いい意味でこちゃ混ぜで受け入れられてきたじゃないですか。それってなんか、すごく日本的というか、寛容だと思っんですよ。たとえば神仏習合の本地垂迹説で、日本の神様は仏なんだって言われて、当時の人はよく納得できたと思ったりもする（笑）  
杉 うんうん。  
稲 そういう道程で信仰を捉えた場合、「私は〇〇を信仰しています、信仰していません」という告白や、0か1かAかBかみたいな線引きがなく、心のなかにある信仰自体が線的なかたちをしているんじゃないかかなと思っんです。宗教っていわれて想像するような、決められたルートに誘導していく登山型の信仰だけではなくて、多方面に線を伸ばしながら、時には山を經由したりして、少しずつ自分

稲（思わず立ち上がり、拍手）  
杉 すごく尊かったです。推しには、もちろん商業的な側面もあるのですが、私は阿弥陀さまに話を重ねて読んでいました。いつか会いについても推しは受け入れてくれるって、それも阿弥陀さまやんって（笑）でか美ちゃんみたいに阿弥陀さまを信仰できてたら、救われることに近いんやろなって思っんですよ。  
稲 うわー。まさに、それを目指してたから、うれしすぎる。  
杉 推しの名前をつぶやいて、いい名前だなあと思いにふける話は念仏みたいでしたね。でか美ちゃんははたから見ると熱烈な信仰者なんですけど、実はすごく優れたバランス感覚があるから、関係性が成立してるんですよ。稲 そうなんです。この号は推すという行為や信仰も含めて、ちよっと遠くにある存在と自分との関係性、その距離感について、考えられる号にしたいと思っっていました。

稲 そうそう。2015年とか、まだ学生のときですかね。  
杉 なんやこの人、すごい面白い人が現れたって、皆で言っていました（笑）  
稲 それから僕がライター・編集者として独立したときに初めてお会いして、一緒に鴨川を歩いた記憶があります。  
杉 稲田さんの印象が強く残っているのは、なにかの忘年会で「久しぶり、元気？」って挨拶したら、ちよっと元気がなくて。

信仰と編集

稲 実は編集をしながら、ずっと悩んでいたのが、信仰や布教についてだったんです。おそらく平成生まれくらいの僕の世代は、カルト宗教に対する怖さがめちゃくちゃあって。伝統宗派に属している自分はカルトではないと思いがながら、でもどこかで自分がやっていると、カルトと構造的にはなにも変わらないんじゃないかっていう怖さがありました。仏教って伝わりと同時に、宿っていくような性質の情報だから、それを扱う媒体として意識せざるを得なくて。  
稲 稲田さんの目には、教えを伝えることの目的が、お坊さんの生活を維持

## 稲田ズイキ

フリースタイルな僧侶たち編集長（3代目）。京都府久御山町の称名寺と大阪府能勢町の西方寺の副住職。同志社大学法学部を卒業後、広告代理店で会社員経験を経て、2018年に作家・編集者として独立。著書に『世界が仏教であふれだす』（集英社）がある。



杉 お寺の中にある牛頭天王像なんてインドの祇園精舎の守護神だし、よく考えたら「あれ、神さまやん？」と不思議になるけど、今でも当たり前前に受け入れちゃいますよね。

稲 フリースタイルな僧侶たちでやりたかったのは、伝えるっていう上から下に降りてくる情報の流れではなく、受け入れて縦横斜めにつないでいく編集そのものあり方でした。編集部自体が一本の線になって、さまざまな線につながり、自ら編まれて束になっていくようなイメージ。一冊の雑誌を読むというのはその追体験なんです。最近思いついたんですけど、それが僕らでいう布教の「布」なんですよ。「領土を拡大していく」という意味の布ではなく、「布を編む」というイメージでの布でありたいなと思うんです。

杉 仏教には長い歴史があって、たくさんのお教者がなんとか入口を作ろうとした、その試行錯誤の積み重ねと残骸が、私たちの見ている世界じゃないですか。そのはじまりの一つひとつは、これやったら課題を解決できるんじゃないか、時にはこれは商売になるんじゃないかとか、さまざまな観点から生まれたアイデアだと思うんです。とにかく稲田さんの時代のフリストは、毎回その入口を模索することから始めていて、答え合わせをすることだけは絶対にしないという強い意志を感じました。一号一号、入口を直感的に決めた後から、じりじりと近づいていく



感じが伝わってくる。

稲 62号の特集「金」とか、まさにそうですね。なんで金にしんやろうって作りながらノイローゼでした(笑)杉 私は仕事柄、編集自線で見てしまわんですが、金はぶっつけて選んだなと思いましたが、読者の感じ方はわかりませんが、少なくとも私は編集部側の試行錯誤を一つ一つのコンテンツに感じました。作り手の歩みを追体験して、自分の中の道筋にそれをトレースしながら進んでいくような読み心地ですよ。トレイルルトに近いのかも。

稲 あくそう言ってももらえて、救われた気持ちです。杉 それで思い出したのが、61号の特集「休む」に田中帆夏さんが書かれた、茶道の先生に教えてもらいながら野点をするエッセイ「お茶でも啜ろうではないか」が好きでした。なんかこの人呼吸してるなあって。先生の言葉に身を委ねて、手を動かして、もう一度先生の言葉を杖にしながら、自分でなにかをつかんでいく。物事を学んでいく上で、すごく美しい道の描き方やなと思えました。私の仏道もこうありたいな、と思ったりして。稲 実は僕自身この「休む」号が一番

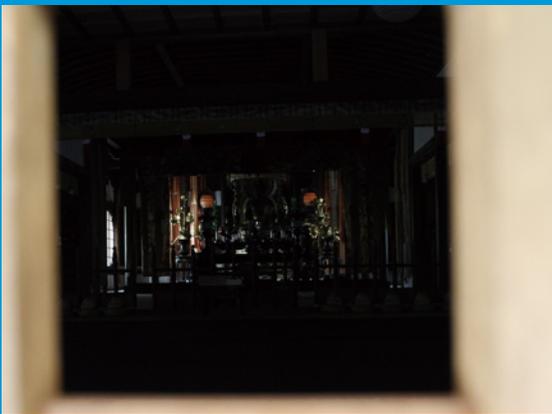
好きなんです。何回も読み返したくなる。稲田さんの優しい感じが出ていて、これまでの号のなかで一番優しい印象がありました。

僧侶と石ころ  
稲 いろいろと悩みながらやってきたんですが、なにも救いになっていないのは、発行するたびに「編集部に入りたいです」と連絡をいただいていたことでした。

杉 青森の大学生の方が誌面を読んで、入ってくれたりしたんですよ。稲 それ、ほんまに嬉しかったですよ。おかげで、編集部は僧侶と僧侶じゃない人、ちょっと平々くらくらくで構成されてきました。でも、最後まで悩んでいたのが、雑誌のタイトルが「僧侶たち」なところでした(笑)杉 さっきまでの話を聞くと、稲田さんがやりたかったのは、「フリースタイル仏道」とかになるのかな。稲 アウトサイダー仏道かもしれない(笑)杉 私も、思うところがあるんですよ。私って、仏教界では「在家仏教徒」ってひとくりにされるじゃないですか。稲 そうか。もう在家って、日本だと成り立っていない言葉ですよ。

ないですか。どういう指導を

されているんですか？杉 まずは「何か言わなきゃいけない」って感覚をほどこしてもらいたいので、たとえばこういうワークをやるんです。稲田さん、これから質問をするので、即座に答えてみてください。では、稲田さんにとって……南無阿彌陀仏とは？稲 え！え、な、名前を呼ぶこと！杉 南無阿彌陀仏とは？稲 えー……光？杉 間髪入れずに！南無阿彌陀仏とは？稲 うーん……過ぎ去りしものを、見ている。杉 南無阿彌陀仏とは？稲 声があるということ！杉 南無阿彌陀仏とは？稲 い、生きています！杉 ありがとうございます。これをグループで順番に一人ずつ答えてもらいます。そして5周目くらいで、宗派の教義に近い回答は出尽くすんですよ。「おばあちゃん」「真珠のネックレス」「道端の石ころ」とか、本人すら思いも寄らない言葉が出てくるんです。それから、短歌でもラップでも小説でもなんでもいいので、とにかく手を止めずに書いてくださいってお願いすると、「私にとって南無阿彌陀仏と



は石ころである」とっていう、聞いたことのない法話が生まれるんです。稲 このワーク、めちゃくちゃおもしろいですね。杉 自分の中から生まれた言葉で法話を組み立てることって、今の布教の研修過程では難しいんじゃないかなと思います。でも稲田さんは、最初から「自分のなかにない言葉を語るのって、なにそれおいしいの？」くらいの雰囲気、活動をはじめてるじゃないですか。私はそこがすごく嬉しかったなと思うんです。

稲 そう言ってもらえたら、嬉しいなあ。石ころで思い出したんですけど、僕3年前に山で石ころを拾ってきて、それにジョイって名前をつけて、それから毎朝ずっと「ジョイ」って呼んでるんです。杉 なんてやねん(笑)稲 自分なりの南無阿彌陀仏の研究なんです。たまに日向ぼっこをさせたりね。

#### 代謝する仏教

稲 こうやって振り返っていると、仏教と現代社会との間にはまだまだ構造的な問題があって、もってできることがあったんじゃないかって、悔しい気持ちになってきますね。杉 私、思うんですよ。そういう構造って、人間という生き物の習性として免れないんじゃないかなあって。大切なものができれば守りたくなるし、そのためには仲間を集めて、信仰を募って、他の人にも伝えたい。組織ができれば、守るためにお金が必要になってくるわけ。

稲 はい。杉 でも結局、それも含めつつ、私が出会ってきたようなおもしろいお坊さんたちが登場してきたり、これからやってみようという新しい人たちが出てきたりして、解体・再構築されてきているのは、仏教が人間そのものの真理をつかんでいるからじゃないかなって思っています。稲 すごくわかります。杉 人間という自然をよくわかっている教えなので、最終的にはその教えを受けた人が、自分で手づかみをはじめると。だから、構造的な課題はあるんだけど、それを解きほぐす鍵も一緒に持っているんじゃないかなって。稲 システムを更新していくプログラムがもうすでに組み込まれているってことか。たしかに、これまでの仏教の歴史も、時代や土地ごとに適用しながら芽吹いていったものですね。

杉 そうそう。彼岸寺で連載しているときは、ずっとそれを思いめぐねていましたね。私は何なんやろうって。稲 杉本さんはどういう道程で、仏道を歩んでこられたんですか？

杉 私は珍しいと思うんですよ。100%自分のペースで歩いてこれました。たとえば、この法然院さんは気持ちのいいお寺になって感じていて、学生時代からよく訪れてました。そういう縁があって、たまたま私がお坊さんのインタビューをやりたいと思ったときに、一番最初に浮かんできたのが、法然院住持の梶田真章さんだったんです。稲 そういって経緯だったんですね。

杉 「どうしてお坊さんになったんですか」を聞くインタビューだったのですが、一人の人間として仏さまと出会うまでの話や、信仰が人生に与えた影響を話してくださいませんか。たくさんのお坊



杉本さんに取材してもらった記事が宝物だと稲田は語る。大法輪 2020年4月号掲載「お寺のソーシャルデザイン」第12回若き僧侶が「遊行」に出る理由

さんの話を聞いていくなかで、私なりに「そうかも」「そうなんや」と、ぼとぼとぼと腕に落ちていって。それがあふれたときに手が合わせられた。そういう道筋でした。だから、すごく待ってもらえたんですよ。私が自ら手を合わせたくなるまで、ずっと待ってもらってたって思ってるんですよ。お坊さんとお寺と、仏さまに。稲 僕もね、僧侶としては、もっと前向きにのめり込んでいかないといけない立場なはずなのに、最近なんですよ、仏教書をちゃんと読み始めたの(笑)杉 時が満ちるのを待っていたんですね(笑)稲 わかんないけど、わらうと少しずらうところがあるんですよ。杉 先に答えを持っていたくないんだ？稲 そうなんです。

杉 その余白を置いておくって、なにか独特のセンスというのか、平衡感覚なんだと思います。お坊さんって、人前で間違っちゃいけない、答えがなきゃだめっていう強迫感がどうしても強いじゃないですか。素晴らしい責任感だと思んですけど、それがゆえに自分で答えを手作りする機会が少ないんですよ。誰が悪いかかわらないけど、ある意味では呪縛ですよ。

稲 杉本さんは、布教師をされているお坊さんを対象に、寺報づくりの講師をされているじゃないですか。稲田さん、フリストスタイルの名の通りなんじゃないかな。私が総括するのは変ですけど(笑)稲 きれいにまとめていただいて、ありがとうございます(笑)編集部が代謝していくのは、すごく仏教的なのかも思いません。杉 次の編集長へ、稲田さんから受け渡したいことはありますか？稲 えーなんだろう。編集って、なにか出版物を出すことだけじゃなくて、全部じゃないですか。稲 うん。

稲 誰を集めて、どう毎日雑談して、どう会議を開いて、そのすべてが誌面に出ると思うので、無理に装おうとすれば、どこかで無理が出ちゃうんですよ。さっき石ころの話が出ましたけど、石ころをどう眺めるかってところから、誌面ってつながっていると思うんです。なので、一人の人間としての編集を目指してほしいなあと思います。杉 たえば、それがバックパキの法衣を纏った誌面でもいいんですよ。稲 そうです、そうです！それが編集の道ならば。杉 一読者としても、新しいフリストアを見せたら、嬉しいですね。稲 楽しみですね。杉本さん、今日はありがとうございます！また話聞いってください。



杉本さんゆかりの法然院にて。フリストの法人サポーターとして長年ご支援いただいています。

## フリースタイルな僧侶たち 協賛法人サポーター

■浄土宗 延命寺(堺市堺区)吉祥寺(萩市)  
慶蔵院(伊勢市)金剛寺(京都市東山区)西  
明寺(尼崎市)西林寺(大阪府泉南郡)正覚  
寺(青森市)清浄華院(京都市上京区)正善  
寺(伊丹市)称名寺(京都府久世郡)勝樂寺  
(町田市)新善光寺(札幌市中央区)青岩寺  
(青森県上北郡)善願寺(甲賀市)善道寺(札  
幌市豊平区)臺鏡寺(枚方市)檀王法林寺(京  
都市左京区)潮音寺(東京都大島町)念佛寺  
(八幡市)梅窓院(港区)法岸寺(静岡市清  
水区)寶松院(港区)法善寺(大阪府中央区)  
妙慶院(広島市中区)龍岸寺(京都市下京区)  
■浄土宗西山禅林寺派 宝泉寺(津島市)  
■浄土真宗本願寺派 覚円寺(福岡県築上郡)  
教専寺(赤穂市)幸教寺(大阪府生野区)光  
照寺(大阪府東淀川区)西方寺(大和郡山市)

西法寺(北九州市)正源寺(大津市)浄満寺  
(大阪府西成区)信覚寺(福岡県朝倉郡)崇  
興寺(福山市)養法寺(金沢市)  
■真宗大谷派 正蓮寺(伊豆の国市)護念寺  
(新潟市)宝皇寺(函館市)  
■浄土真宗東本願寺派 緑泉寺(台東区)  
■天台宗 圓融寺(目黒区)正明寺(姫路市)  
本覺寺(横浜市鶴見区)  
■高野山真言宗 薬師院(岸和田市)  
■真言宗御室派 三津寺(大阪府中央区)  
■真言宗須磨寺派 須磨寺(神戸市須磨区)  
■臨済宗妙心寺派 圓光寺(台東区)宜雲寺(江  
東区)勝林寺(豊島区)陽岳寺(江東区)龍  
雲寺(世田谷区)  
曹洞宗 四天王寺(津市)瑞生寺(浜松市中区)  
南詢寺(守口市)鳳仙寺(宮城県亶理郡)

■日蓮宗 池上實相寺(大田区)  
■単立 五百羅漢寺(目黒区)瑞聖寺(港区)  
法然院(京都市左京区)  
■企業・団体・店舗 アンカレッジ(港区)生  
田化研社(豊島区)有限会社石の坂本(台東  
区)大阪石材工業株式会社(富田林市)京美  
仏像(京都市北区)薫寿堂(神戸市灘区)神  
戸数珠店(京都市下京区)作島(京都市下京  
区)寺院コム(京都市左京区)翠光堂阪急淡  
路駅前店(大阪府東淀川区)大正大学(豊島  
区)学校法人鎮西学園(熊本市中央区)豊田  
愛山堂(京都市東山区)一般社団法人日本石  
材産業協会(千代田区)はせがわ(文京区)  
福生(堺市西区)  
(敬称略・順不同)

## サポーターを募集しています

フリースタイルな僧侶たちは、無料のマガジンです。現在の収  
益はグッズ販売以外はなく、発行ができていないのは、ひとえに  
みなさまのご寄付のおかげです。編集部一同、さらに充実した  
誌面にすべく励みますので、サポーターとしてご支援いた  
だける方は、公式サイトよりお申し込みいただくと幸いです。

[年会費]  
個人 5,000円 法人 30,000円

[特典]  
・発行ごとに冊子を送付  
・主催イベントにおける優待  
・誌面の協賛法人欄にお名前を掲載(法人のみ)

サポーターのお申し込みは  
こちらからお願いいたします。  
<https://freemonk.net/support/>



発行記念グッズ発売予定!  
詳細は各種 SNS からチェックしてください!

X @freemonk\_web  
Instagram @freemonk\_official

フリースタイルな僧侶たち 第63号  
2024年6月23日発行

発行人 加賀俊裕  
編集長 稲田ズイキ  
編集 鵜飼ヨシキ、わかめかのご  
編集協力 釋 大智、苔米地結子、秦正顕、  
藤山亜弓、K.Norimasa、m.ito  
校正協力 森 愛佳、ビビディバビディ部 タケン  
デザイン 福井裕孝  
Web制作 磯部亮太  
表紙デザイン 平山昌尚

発行所 フリースタイルな僧侶たち  
〒542-0085 大阪府大阪市中央区心齋橋筋2-7-12  
TEL 050-5583-4330  
Mail info@freemonk.net

[www.freemonk.net](http://www.freemonk.net)

## 編集部よりご挨拶



写真=安武慶哉

フリースタイルな僧侶たちに関わるすべてのみなさま、  
初めまして。秦正顕と申します。この度、三代目編集長の  
ズイキさんよりバトンをもらい、四代目編集長を引き継が  
せていただくことになりました。

私がフリースタイルな僧侶たちに出会ったのは、10年前  
のこと。当時は大学生で、お寺で生まれたものの僧侶にな  
りたくなかった私に、仏教の裾野の広さと可能性を示して  
くれたのがフリストアでした。読んだ感動そのままに深夜バ  
スに乗り込み、当時編集長だった若林さんに会いにいき、  
たくさんのことを教えてもらいました。振り返ると、その  
言葉たちが、今日の自分へと導いてくれたと感じています。  
そんなフリースタイルな僧侶たちに、今度は作る側として  
関わらせていただくことになり、心から嬉しく光栄に思っ  
ています。

この15年、フリースタイルな僧侶たちが、フリーペーパ  
ーという形態で毎月1万部以上もの冊子を発行し続けてこ  
られたのは、ただただ支えてくださる皆さまのおかげです。  
これまでの歩みに感謝し大切にしながら、これまで以上に  
より多くの人たちに、仏教の豊かな世界に出会ってもらえ  
るきっかけ作りができればと思います。僧侶やお寺に関わ  
る皆さま、そして、これから仏教に出会っていただくさ  
んの方々と一緒に、フリースタイルな僧侶たちを盛り上げて  
いけたら嬉しいです。これからもどうぞよろしくお願  
いいたします。

第四代編集長 秦正顕(写真左)

15周年記念号、特集「謝」いかがだったでしょうか。こ  
れまでの期間、長きに渡って活動することができたのは、  
ご支援くださっているサポーターのみなさま、発行をたの  
しみに待ってくださっている読者のみなさま、制作を手助  
けくださっている関係者のみなさまのおかげです。心より  
感謝申し上げます。

弊誌の特徴は、編集部が代読していくところにあります。  
今号をつくったのは三代目の編集部で、これが最後の発行  
になりました。活動はコロナ禍の最中からはじまったこと  
もあり、発行の意義を自問し、悶々と悩んでは、自分に受  
け渡されたバトンの重みを感じ、編集に励んだ日々でした。  
成し遂げたと胸を張れるものはびっくりするほどになく、  
ただ最後となるあとがきを書いている今、ありありとこの  
手に伝わってくるのは、こんな言葉も誰かが読んでくれて  
いることへの喜びと感謝でした。ひとりではなく複数人で  
集まって、自らの思うところを表現し、さまざまな文脈を  
編み込みながら、一冊の本に綴じて届ける。そして、それ  
を受け取ってくれる読者の方々がいる。その尊さに気づけ  
たことが、私自身の何よりも宝物になりました。

これまでみなさまからいただいた15年分の思いを胸に、  
これからも続いていくフリースタイルな僧侶たちを、よろ  
しく願っています。たまたまこの号を手にとった方、  
次号もどこで見つけてください。またどこかでお会い  
しましょう。

第三代編集長 稲田ズイキ(写真右)

